

た ち ば な 新 聞

発行所 宝清寺
〒197-0821
東京都あきる野市小川101
電話 042-558-2663

宝清寺の年中行事	
二月節分	厄除け・星祭
三月彼岸中日	彼岸塔婆供養
四月八日	花まつり(灌仏会)
四月八日	オリエンテンプリング
七月十七日	お盆塔婆供養
七月十七日	施餓鬼法要
九月彼岸中日	彼岸塔婆供養
十月十二日	お云式法要
十二月初旬	お盆金締札

春のお彼岸

十七日(彼岸入り)
二十日(彼岸中日)
二十三日(彼岸明け)

春の御彼岸にはお塔婆を建て、ご家族で墓参し致しましょう
※管理寺務所に生花、お線香の用意があります

年始の一月一日に能登半島で発生した地震により、石川県珠洲市や輪島市を中心とした広い範囲で、多くの方々が甚大な被害を受けた。

連日、被害や復旧の状況、被災された方々の生の声が報道されています。寺院の被害状況は報道されていませんが、珠洲市妙珠寺では、前任職夫人が倒壊した本堂の瓦礫の下から心肺停止の状態で見えられ、同市本住寺は本堂・庫裡・山門・水屋などが倒壊、更に、輪島市妙相寺も本堂の屋根が室内に落ちるなどの被害を受け、復旧は厳しい状態だそう。北陸教区の各管区を通じて、日蓮宗宗務院に、石川県にある各寺院の仏像仏具位牌の転倒、本堂庫裡の一部壁の崩落、墓石

住職ひと口法話 第七十六回

二月五日、関東地方が大雪に見舞われ、交通機関に相当な混乱が生じ、高速道路が閉鎖され一般道を走る車は大渋滞に見舞われ、通常一時間で帰宅できるのに四時間も掛かったと話すがいた。

わたしは自宅から雪景色を眺め、久しぶりの大雪で珍しく綺麗だったので、スマホで写真を撮った。綺麗に撮れていた。その写真を見て、若い頃「雪景色は何故美しいのか」と仲間数人と議論したことを思い出した。ある一人は「雪景色の綺麗なのは、雪の白さが汚いものを全て隠し白一色の銀世界になるからだ」と話した。私は加えて「雪が建物の屋根などの角張った箇所を丸く包み、柔らかい雰囲気を出し出していることもあるのではないか」と話し、仲間の賛同を得た。また、「角がないことが美しい」とことから、夏目漱石の「草枕」の冒頭に「山路を登りながらこう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹差せば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい。」を思い出

や石灯笼倒壊などの報告が届いている。



(写真は日蓮宗新聞より)

日本人は古来、度重なる自然災害など不幸にして避けられない困難に果敢に立ち向かい、立ち直つて、今日の国家社会を築いてきました。
国家の危機に出現した日蓮聖人は、「災い來たるも変じて幸となさん(『道場守護事』)の「変じて」は、法華經の經文から受身の変化ではなく、能動的、積極的な生き方による幸福の希求と進化であると教示されています。

した。

現代社会は個人が尊重され、個人情報保護がスマホの普及が目覚ましく、世の中が自分中心となり、皆がイライラして殺伐とした世の中で、人間関係が「角張って、ゆとりがなく、住みにくい」と感じている人が多いのではないかと思います。

宝清寺の玄関に荒了寛の絵と文のカレンダーが掛けてありますが、その中の文に

云わなくても 分かる人
云えば わかる人
云つても わからない人
云えば 文句を言う人
はじめから 聞こうとしない人
はじめから 聞こうとしない人

最近「云えば 文句を言う人 はじめから 聞こうとしない人」が増えてきているのではないかと思います。
西洋人が自然を征服するのとは対照的に、日本人は自然の事をよく知って、柔軟に人間関係や生活様式を組み立ててきました。そのことを思い起こして精神的にゆとりのある生活を心がけたいものです。

能登半島地震の被災者の整然たる避難の姿は、日本人の精神性の高さを示しており、外国のメディアが奇跡と賞賛しているようです。

犠牲者のご冥福を祈り、多くの被災者・被災地の一日も早い復興を祈念するばかりです。

駿河の妙法尼から身延山の日蓮聖人のもとへ「夫は病の床にありましたが、昼夜に法華經を誦し、臨終を知つて二声高い声で『南無妙法蓮華經！南無妙法蓮華經！』と唱えて亡くなった」としたためた手紙が届きました。

日蓮聖人は妙法尼に「日蓮は幼少の時より仏法を学び候しが念願すらく、人の寿命は無情なり。出づる気は入る気待つ事なし。風の前の露、なおたとえにあらず。かしこきも、はかなきも、老いたるも、若きも定め無き習いなり。されば先ず臨終の事を習うて後に他事を習うべし。」(『妙法尼御前御返事』)と返信されています。

これは、「日蓮は幼少の時から仏法を学んできたが、ひたすら願ひ望み続けたことは、それぞれの人の生命は無情であり(經典に説かれてるように)やがて吐く息ばかりになって息を吸う事ができなくなる。人の生命の儂さは、風に吹かれる露よりもなお儂いもの、賢い人も愚かな者も、老人も青年もいつ生命を喪うかわからない。そのように何事も儂いのが世の常なのであるから、人はまず死に直面する心構えについて教えを受けて、その後他事を学ばなければならぬ」という事なのである」という意味です。

人の生命ほど尊いものはありません。日蓮聖人が「先ず臨終の事を習うて後に他事を習うべし」といわれているのは、人はいつ死ぬか分からないつまらない存在だと仰せになっているのでありません。むしろ逆に、人生は無常だということを確認したうえで、人生の積極的な営みは、まさに、人が死を迎える瞬間にこそ確かめられるものであるとおっしゃっているのだと思います。

法華經には、私たちの生命は過去世・現在世・未来世を一貫する生命であることを教示しています。そうであれば、死は単なる人生の終焉ではないはず。それだからこそ、いづれ死を迎えることを覚悟した人生の素晴らしさがあるといえるのではないのでしょうか。死は確かに私たちに何と何時訪れるか分からない終焉です。だから、一生懸命に自身の人生を築き上げて行かなければならないのだと思います。

私たちが今生の人生を「自利自欲」に任せて、ささやかな幸せに安住するのではなく、「死」を厳肅なものとして受け止める態度が、悪への誘惑の多い私たちの人生を正しく導いてくれるのではないのでしょうか。